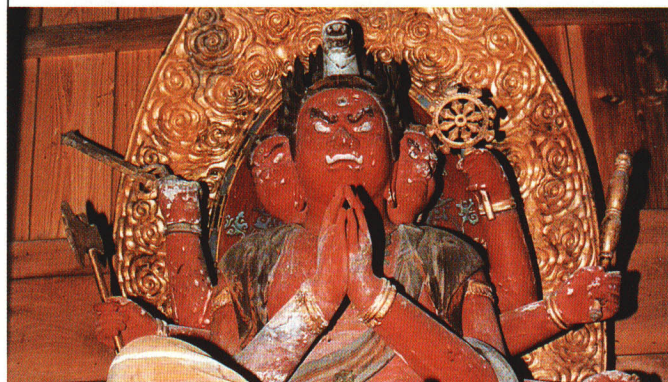


馬頭観音座像

ばとうかんのん
ざざう

鎌倉～室町時代の作といわれ、寄木造りで三面八臂^ひ、頭上に馬頭を乗せ憤怒^{ふんぬ}の姿、左右八本の手にはそれぞれ宝輪、宝棒、数珠、剣斧を持ち、合掌して宗教的理念を表しています。昭和42年には福島県重要文化財に指定されました。

また、この観音には弘法大師がこの地を訪れた際に山中で霊木(槻木)を見つけ、その木から三体(馬頭観音、下郷町の小野観音、童生の聖観音)の仏像を刻んだという伝説も残されています。以来、槻木を切り出した所を大槻、斧切沢と呼ぶようになったとか。



板小屋遺跡

いたごやいせき

寛永2年(1625)に蒲生氏郷と共に会津入りした近江(今の滋賀県)の木地師の集団が住んでいた集落跡。そこに住む人々は轆轤^{ろくろ}を使い膳や椀、盆、玩具などの木地工品を制作していました。

「日本国中木地師巡回帳簿」という記録には、最盛期には28戸が暮らしていたと書かれ、白河藩主松平定信もここを訪れています。しかし、300余年の繁栄を続けた後、この村も天保の大飢饉に見舞われ、村は崩壊。現在、遺跡には90基ほどの墓碑群が並び、花や季節の果物が供えられています。



馬入峠堡塁跡

ばにゅうとうげ
ぼらいいあと

更目木と郡山市福良の境、馬入峠の頂上(標高760m)に残る土塁。

慶長5年(1600)関ヶ原の戦いがおこり、西軍の石田三成に味方した上杉景勝が徳川家康を敵にまわして10万石の会津を守るために構築したものです。しかし、実際には家康軍の会津攻めは行われず、東軍の大勝、よって上杉景勝は西軍に味方したため、米沢30万石とされました。また、戊辰戦争のときにも会津藩はこの土塁を修復し、官軍の攻撃に備えたといわれています。



牧之内宿

まきのうちじゆく

およそ300年前、江戸時代から続いた宿場町。復元された一里壇と樹齢何百年という見事な屋敷林が歴史の流れとノスタルジックな昔の面影を漂わせています。当時は、この街道沿いに旅籠^{はたご}が建ち並んでいました。現在では当時のような茅葺き屋根の建物を見ることはできません。しかし、間口が狭く奥行きのある宿場町特有の町割は残り、今でも「本陣」「江戸屋」「河内屋」「柏屋」などの昔の屋号で人々は呼びあっています。周辺の路地は、歴史漂う緑の風を受けてのんびりと散策するのにオススメのスポットです。

